

日程	場所	内容
7月29日	淡路県民局	県民局での主な取組み等についての説明
	淡路広域防災拠点	現地視察
	くこうみ太陽光発電所	現地視察
7月30日	北播磨県民局	県民局での主な取組み等についての説明
	高砂来て民家	県民交流広場事業の成果視察及び意見交換
	東播磨県民局	県民局での主な取組み等についての説明

現地調査内容

淡路広域防災拠点

東南海・南海地震等の想定されている災害発生時に、淡路地域全体が一時的に孤立状態になったとしても、県民の命を守り、非難・救助・援助を迅速かつ円滑に行えるように整備している。

機能としては、①備蓄機能（被災者用物資・救助資機材など）②救援物資などの集積・配送機能（域外から送られてくる荷物の仕分け機能）③応援要員の駐屯機能を担う。

ただし、備蓄量自体が少なく（非常食で6000食など）機能①よりは②に重点を置いている。備蓄については、各市が中心に行っており、また企業との協定（災害時に物資の提供を約束する）を進めているとのことであるが、少なくとも各市の備蓄状況や企業との協定状況を把握し、「全体として何が足りないか」という視点から計画・指導するのが県行政の役割だと思う。

立地条件としては、広いスペースがあり、災害発生時にはゲートを開き通行が可能となる“緑パーキングエリア”が傍にあることなどの優位性がある。また、駐屯用地には自衛隊が毎年野営訓練を実施しており経験地の積み重ねもされている。



項目	淡路広域防災拠点の在庫状況	
	品名	数量
被災者用物資	アルファ一化米	6,000
	毛布	4,980
	ブルーシート	615
	飲料水	3,000
被災者用資機材	仮設トイレ	30
	テント	100
	台車	10
	一輪車	10
	リヤカー	5
救助用資機材	仮設風呂	3
	投光器	3
	発電機	1
	人命救助システム	2
要員用	船外機付きボート	4
	簡易ベッド	50
	無線機	2
	トランシーバー	10
	仮設トイレ	15

住民参加型くうみ太陽光発電所

「あわじ環境未来島構想」のもと、目玉の一つとして「エネルギーの持続」を目指し、この住民参加型の太陽光発電事業がスタート。

しくみは、県民は兵庫県からこの事業の費用（貸付）にあてるとして県債を購入（4億円分が完売。全部で471件の販売）し、これを建設資金として兵庫県が発電所（運営主体：淡路島くうみ協会）へ貸付。発電所が、電気を電力会社に売った収入から兵庫県に返済し、県から住民へは県債の償還という形で還元される。

平成24年度内に経産省の認定および関西電力へ売電契約申込みを完了したため、売電価格は40円/kw。年間100万kwhの発電を目標としており、現在までの見通しでは達成可能ペース。（4月137550kwh、5月157490kwh、6月123580kwh）※太陽光パネルの表面温度が高くなりすぎると、発電効率が落ちるため気温的には5月頃が最適とのこと。

予定では、100万×40円=4000万円（年間）の売上げから、メンテナンス（140万円）やパネルの表面清掃（100万円）などの運営経費を差し引いて返済。

20年の計画ということで、今は順調でも今後起こりうるアクシデントに対する備えは常に注意しなければならない。

例えば、現状、パネルへの物理的な攻撃を防ぐために、高いフェンスと低い鉄筋格子の組み合わせで獣の侵入を防ぎ、監視カメラによって人間の侵入にも対応している。

また、機器の性能保証などに関しては国産（有名）メーカーのものを使用する工夫。

さらに、“住民参加型”ということで、周辺景観に配慮した工夫（配線の配色や地中化、周囲を公園として整備しオリーブなどを植樹し緑を増やすなど）が見られた。



高砂来て民家（県民交流広場）

県民交流広場事業を利用して、市民から無償で提供された古民家を再生していた。決してアクセスが好いとは言えないが、前の通り・裏手の川沿い（昔は倉庫街として栄えたとのこと）など、かなりの情緒的な風景が残っている。

ここを利用して、婦人会やガールスカウト、歴史研究グループなどが活動。運営にあたるまちづくり協議会とも連携し、昔ながらの生活体験（雛祭り、かまど体験）や伝統文化体験（高砂染め、茶道、落語）事業などを開催して、地域の交流、魅力の再発見に取り組んでいた。

1300万円の事業費のうち、ほとんど（1000万円強）を古民家の再生（修繕や耐震補強）に使ったため運営に苦勞されているとのこと。県全体にあてはまる課題だが、県民交流が県費をあてにして（それが尽きれば終了する）というのでは意味がなく、（運営形態が）持続可能な形を模索していかなければならない。

運営のために、会費や参加費（過度の負担にならず公平感のあるもの）を徴収するのか、販売や場所の提供・労務の提供などで収益を上げるのか、そのベストミックスを見つけ出して頂きたいし、県下に前例となるような活動を期待したい。



NPO 法人シミンシーズ 意見交換会（東播磨県民局内）

前回視察（姫路）での「コムサロン21」に引き続き、「いわゆる NPO の中間支援に携わっておられる NPO の方々と意見交換ができた。

重ねて感じるのは、県下に順調に増加してきた NPO（法人）も、活動の継続が困難であるとの報告が多く、NPO（法人）の活動を支える中間支援団体の大切さ、需要の高まりである。しかし、中間支援の NPO にとっても「資金集め」「人材育成」「キャリア形成」が困難である状況は変わらないとのこと。理事長の言葉をお借りすると「人件費はボランティア、事業費は助成金（公的な）で、産業として成立していない」「日本で NPO が伸び悩んでいる背景には欧米との寄付文化の違いが大きい」

シミンシーズでは、この課題を解決する方法（収益事業）として、企業研修（チームビルディング）や高校との連携（若い内から自立を促すキャリアデザイン授業）などの開拓を進めるとのこと。

官と民の違い（役割分担も含め）や、そもそも（中間支援）NPO 法人がそのどちらに属し、どのような位置づけとなるべきかについて、まだまだ研究・議論の余地が残っているが、課題解決案に対しても、“市民が自立（自律）を目指す”という設立コンセプトにも沿った展開を考えておられることに、感心するとともに今後の活動に大いに期待したい。

以上